

# 魯迅の「摩羅詩力説」材源の新発見

## ーロシア作家コロレンコについて

張 宇 飛

### 抄録

小論は明治期におけるロシア作家コロレンコの受容を整理し、小山内薫が雑誌『新小説』で発表した評論「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」が魯迅の「摩羅詩力説」のもう一つ材源であることを明らかにするものである。小山内薫のこの文章は明治期におけるコロレンコを最も全面的に紹介した文章である。この文章の中で、コロレンコの小説「末光」についての紹介はちょうど魯迅の「摩羅詩力説」の結論部分が参照した内容である。この材源の発見は留日期の魯迅が明治期の刊行物の外国文学の評論や翻訳を通し、自らのテキストに引用したことを呈して、「魯迅とコロレンコの関係」という課題の研究、ひいては留日期の魯迅と外国文学、とりわけロシア文学の受容という研究に資するものであると考える。

キーワード：魯迅 コロレンコ 「摩羅詩力説」 小山内薫 明治日本

### 一、「摩羅詩力説」材源についての先行研究

魯迅（1881-1936）は留日期の1908年、ペンネーム「令飛」を使い、清国留学生が主宰する雑誌『河南』第二期、第三期に文学論「摩羅詩力説」を発表している。「摩羅詩力説」は魯迅の初期文学観形成の重要な文献として、研究者に重視されてきた。統計によれば、「摩羅詩力説」についての研究は九十年以上の歴史がある<sup>(1)</sup>。「摩羅詩力説」の先行研究史において、北岡正子（1936）の著作『「摩羅詩力説」材源考』は実証的研究を通じて、「摩羅詩力説」の材源を考察した。北岡正子の研究は「全世界における「摩羅詩力説」研究史、さらには魯迅研究史において画期的な成果をあげた。一つの研究手法の革命を開けたとも言えよう。」<sup>(2)</sup>ただし、北岡正子の考察対象は「摩

「摩羅詩力説」全文ではなく、考察対象は「摩羅詩力説」の中心部分、第四章から第九章の前半までに登場する詩人達についてである<sup>(3)</sup>。北岡正子の研究を通じて、現在までに判明している「摩羅詩力説」の詩人達について論じた中心部分の材源は、次の通りである。以下に、著者名、書名、出版年（？は不明）のみを記す。

- 1、木村鷹太郎『バイロン 文界之大魔王』1902
- 2、バイロン 木村鷹太郎訳『海賊』1905
- 3、濱田佳澄『シェレー』1900
- 4、八杉貞利『詩宗プーシキン』1906
- 5、Kropotkin, P., Russian Literature (Ideals and Realities) (クロボトキン, P.『ロシヤ文学 (理想と現実)』) 1905
- 6、昇曙夢「レールモントフの遺墨」1906
- 7、昇曙夢「露國詩人と其詩 六 レールモントフ」？
- 8、Brandes, G., Impression of Russia (ブランデス, G.『ロシヤ印象記』) ？
- 9、Brandes, G., Poland (ブランデス, G.『ポーランド』) 1903
- 10、Riedle, F., A History of Hungarian Literature (リードル, F.『ハンガリー文学史』) 1906
- 11、Petöfi, A., Der Strick des Henkers (ペテーフイ, A.『絞刑吏の縄』) ？<sup>(4)</sup>

その他、清水賢一郎 (1967-) は「摩羅詩力説」第五章と魯迅の留日期のもう一篇の論文「文化偏至論」におけるイブセンに関連する材源を確認した。「摩羅詩力説」第五章におけるイブセンの材源は明治期の文芸評論者斎藤信策 (1878-1909) の著作『芸術と人生』に収めた三篇のイブセンを論じる評論<sup>(5)</sup>。

「摩羅詩力説」第四章から第九章の前半までの材源の考証を除き、「摩羅詩力説」第一章から第三章及び第九章の後半部分において外国詩人、外国作品に対する紹介には相応する材源があるかどうか。これは筆者が常に関心を払ってきた問題である。この問題の先行研究として、伊藤虎丸 (1927-2003)、松永正義 (1949-)、中島長文 (1938-)、藤井省三 (1952-) 等がある。伊藤虎丸と松永正義は「明治三〇年代文学と魯迅：ナショナリズムをめぐって」、また、中島長文は「孤星と独絃」で「摩羅詩力説」第二章末ドイツ詩人ケル

ナー（中国語訳は柯爾納、1791-1813）の材源について調査した。そして、ケルナーについての材源にも斎藤信策の評論「詩人ケルナー」であることを明らかにしていた<sup>(6)</sup>。藤井省三は論文「魯迅とアンデルセン」で「摩羅詩力説」の第九章コロレンコ（1853-1921）の作品「末光」は明治期における日本語訳があった。周樹人は1909年6月雑誌『新文林』に掲載する三津木春影訳の「短日」を読んだ可能性が高いと推測した<sup>(7)</sup>。筆者はこの作品を対照してみると、確かに三津木春影訳「短日」はコロレンコの「末光」である。しかしながら、「摩羅詩力説」の発表時期は1908年2月、3月なので、時間的からみれば、三津木春影訳の「短日」は「摩羅詩力説」の材源としては信憑性に乏しいと考える。

これらの先行研究に基づき、「摩羅詩力説」第一章から第三章及び第九章の後半部分において外国詩人、外国作品に対する紹介部分は相応する材源があるはずだと考えられる。李冬木（1959-）も、「摩羅詩力説」の材源は北岡正子が調べた11部の著作以外に、斎藤信策の著作『芸術と人生』を加えるべきだと述べている<sup>(8)</sup>。

以上の先行研究を通じ、「摩羅詩力説」第九章におけるコロレンコの「末光」の材源は今までまだ一つの空白である。

本論はこれらの先行研究をふまえて、新たに発見した「摩羅詩力説」第九章後半部分、即ち全文の結論部分においてロシア作家コロレンコに関連する材源を補充したい。ここで一言述べておきたいのは、本論は李冬木が「留学生周樹人周辺の「尼采」及其周辺」で提起した「周辺」という新概念を取り入れ、「魯迅」という研究視点を「留学生周樹人」という視点に変えたことである<sup>(9)</sup>。そのため、この視点を参照点として、本論も明治日本の歴史現場に戻り、留学生周樹人はどのように小山内薫がコロレンコについての評論は自らのテキストに取り入れたのかを検討したい。これによって、後文においては「魯迅」ではなく「周樹人」という表記に変えようと思う。

## 二、「摩羅詩力説」第九章におけるコロレンコ作品についての材源

周作人（1885-1967）の回想によれば、魯迅は留日時期にコロレンコを特に好んだという<sup>(10)</sup>。その他、周氏兄弟が共訳した『域外小説集』第二冊の「新

訳予告」の中にもコロレンコの小説「海」と「林籟」を翻訳の計画があった<sup>(11)</sup>。ここから推測できるのは、留学時期の周樹人がコロレンコについての文学作品、評論を読んだ可能性が大きいということである。「魯迅とコロレンコの関係」という課題についての先行研究は極めて少ない。管見の限りでは、周新萍の論文『魯迅與柯羅連科簡論』のみが二人の作家の関係を検討した<sup>(12)</sup>。ただし、この論文は「摩羅詩力説」で引用したコロレンコの作品の材源に言及していない。

周作人は当時の外国作品資料を集めることについて次のように回想する：

毎月の初めに各種の雑誌が出ると、私たちは蚤取り眼でさがして、一篇でもロシア文学に関する紹介なり翻訳なりがあると、必ず買ってきて、その部分だけ切り取って保存しておいた<sup>(13)</sup>。

「魯迅について その二」

周樹人は当時に日本の出版物に載せるコロレンコについての作品、評論を通し、コロレンコの作品、コロレンコについての評論を読んだ可能性があるのか。この問題を解決するために、筆者は日本明治期におけるコロレンコの受容を調査した。

明治期におけるコロレンコの日本語訳作品は10部である。明治期におけるロシア文学作品翻訳の1.5%に過ぎない。数はごく少ない。明治36年(1903)から45年(1912)まで、コロレンコの日本語訳作品は次の通りである。内海月杖訳の「堂守」(1903)、吉川英男訳の「鐘樓守」(1905)、昇曙夢訳の「奇火」(1906)、山本迷羊訳の「音楽師」(1908)、梅宿訳の「マカールの夢」(1908)、楠山正男訳の「マカールの夢—聖誕祭の夜がたり」(1908)、秋田雨雀訳の「悪い仲間」(1908)、松原至文訳の「復活祭の前夜」(1908)、三津木春影訳の「短日」(1908)、森鷗外訳の「樺太脱出記」(1912)<sup>(14)</sup>。この10部の日本語訳のコロレンコの作品は『域外小説集』第二冊の「新訳予告」の「海」と「林籟」を含まれていない。これによって、周氏兄弟は日本語で「海」と「林籟」を読んだ可能性を排除できる。このほか、周氏兄弟が留日期に注目したコロレンコの「マカールの夢」は二種類の日本語訳がある。そのため、周氏兄弟

はこの二種類の日本語訳を通し、「マカールの夢」を読んだ可能性がある。

明治期におけるコロレンコについての評論文章は、筆者の調査する限りでは、以下の6点がある。

- 1、「誰か果してトルストイ伯の後継者たる可きか」、『帝国文学』第9巻第2号『海外騒壇』（明治36年2月、1903）。
- 2、小山内薫、「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」、『新小説』第11年第12巻（明治39年、1906年）、7-17頁。
- 3、昇曙夢、「コロレンコの傑作」、昇曙夢『露西亜文学研究』に収録する。明治40年（1907）12月、隆文館。
- 4、二葉亭四迷、「露西亜文壇の傾向」、『キヌタ』（明治41年4月1日、1908年）。
- 5、山田松濤、「チェホフとコロレンコ」、『新小説』第14年第3巻（明治42年3月、1909年）。
- 6、作者不明の「露国の文学」、『太陽』第16巻第2号（明治43年、1910年）。

これらの評論文章を照らし合わせると、筆者は「摩羅詩力説」におけるコロレンコ作品に関する材源は小山内薫（1881-1928）の評論文章「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」である。

「摩羅詩力説」の第九章の後半部分は全篇に対しての総括である。周樹人は当時の中国で「精神界の戦士」が足りないを痛感していた。たとえ「精神界の戦士」を生まれて出ても衆人に扼殺されてしまうことを免れない。これによって、周樹人は中国の「蕭条」状態に対して楽観的な考え方を持っていない。また「次なる維新の聲が、もう一度上がるであろうことも、先の維新に照らして疑いが無い」と断言した。全篇の結論部分に、周樹人はロシア作家コロレンコ<sup>(15)</sup>の小説「末光」<sup>(16)</sup>のあるプロットを引用し、当時の中国精神界の「蕭条」状態をたとえた。この引用されたコロレンコのテキストは伊藤虎丸によれば、魯迅の初期評論の「寂寞と慨嘆を表す」モチーフの代表例である<sup>(17)</sup>。まず、原文の叙述を下記に引用する。

俄文人凯罗连珂（V.Korolenko）作《末光》一书，有记老人教童子读书于鲜卑者，曰，书中述樱花黄鸟，而鲜卑沍寒，不有此也。翁则解之

曰、此鳥即止于櫻木、引吭为好音者耳。少年乃沉思。然夫、少年处蕭条之中、即不誠聞其好音者、亦当得先覺之詮解；而先覺之声、乃又不來破中国之蕭条也。然則吾人、其亦沉思而已夫、其亦惟沉思而已夫！（『坟・摩羅詩力說』、下線は筆者による）<sup>(18)</sup>

日本語訳：ロシアの文学者コロレンコ（V.Korolenko）の「最後の光」に、シベリアで老人が子供に読み方を教えている場面がある。本には桜やうぐいすが出てくるが、シベリアは氷に閉ざされた厳寒の地であるため、このようなものはない。老人はそこで、「この鳥は桜の木に止まって、首をのばして美しい声で鳴くのだよ」と説明して聞かせる。すると子供は、じっと考えこむ。如何にも、子供は蕭条の中にいて、その本当の美しい声を聞くことはできぬが、先達の解説を聞くことはできたのである。だが、わが中国には、蕭条を破るその先達の声さえない。然れば、われらにあってはじっと考えこむばかりなのか、やはりただじっと考えこむばかりなのか<sup>(19)</sup>。

引用のテキストの下線した所は周樹人がコロレンコの小説「末光」を引用したところである。後半部分は周樹人がこれを例として、自らが中国精神界の「蕭条」前景に対する総括と判断である。

この引用する部分の材源は小山内薫が明治期の雑誌『新小説』第十一年第十二巻の7-19頁（明治37年、1906年）に発表した評論「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」である。

「摩羅詩力說」の第九章における引用したコロレンコの作品の材源は次の通りである。

『終りの光』は西伯利亞に流された貴族の裔なる老人と其孫が日出を見る所を叙した、美しいスケッチである。淋しき西伯利亞の夜、老人が孫に読本を教へてゐる處などは、何とも云へぬ書振りである——ドオデエも『老人』と云ふ短編に、四辺の寂莫たる中に、小兒が声を上げて本を読む處を書いて成功して居るが、彼とは又別の味が——「ナイチンゲール

ル』と云ふ鳥の名が読本に出て来た、西伯利亞に育った少年は此美しい鳥の名を知らない、『ナイチンゲールって、何?』と訊く、『鳥ぢや』と老人が答へる。聴て又『桜の樹』と云ふ字が出て来た、少年は又『何?』と訊く、『樹ぢや、其鳥が其樹に留るのぢや。』『留るの? 何故? 大きい鳥なの?』『小さな鳥ぢや。美い声で歌ふぞ。』『美い声で歌ふの?』少年は読むのを止めて暫し思に沈む。<sup>(20)</sup> (下線は筆者による)

この評論は主にロシア作家コロレンコの生涯と代表作品を紹介している。「摩羅詩力説」の第九章における引用した材料はちょうど小山内薫がコロレンコの小説「末光」を紹介したところである。

ここで『集英社・世界文学大辞典』でのコロレンコの紹介に基づき、少しロシア作家コロレンコを簡単に紹介したい。

コロレンコは1853年にウクライナのジトームルで裁判所の官吏を務める貴族の家に生まれた。1863年のポーランド反乱には強い衝撃を受けた。ペテルブルグ工科大学、モスクワの農業大学、ペテルブルグ鉱山大学に学んだが、ナロードニキ運動に参加して、放校、追放、逮捕、流刑が続き、ロシア、ウラルの各地を転々とした。1881年新帝アレクサンドル3世への忠誠の誓いを拒んで東シベリアのヤクート地方へ流刑。1870年代の末から短編小説を書き始め、『マカールの夢』(1883)で一躍有名になった。人間の善良さと人類の未来を信じるヒューマニズムは彼の創作の一貫した姿勢であり、この19世紀の伝統に忠実な人道主義と、写実と抒情を巧みに結び付けた清新な文体は、党派を超えて広く敬愛された。十月革命と内戦の時代には、革命政権と一線を画し、深い憂慮をもって人間性の擁護と文化の保護を訴えた。ゴーゴリーら若い作家たちをよく世話し援助したことで知られる。代表作は『マカールの夢』、『悪い仲間』(1885)、『盲目の音楽師』(1886)等<sup>(21)</sup>。

コロレンコはその生涯において流刑経験があった。そのため、流刑に関する内容が彼の小説創作の一つの重要なテーマになった。例えば、本文は討論する小説「終りの光」が氷と雪が天地を覆うシベリアを背景として、流刑犯人の後裔ある老人と孫の物語を描写している。作品は少年が桜やうぐいす等の好奇心及び少年が陽光に対する渴望と期待を通し、シベリアにおける人々



が自由と幸福の渴望と追及を表している。コロレンコの流刑経験は明らかに魯迅に深い印象を残した。例えば、魯迅は「文芸と革命」という文章で「外国では、革命軍が興る以前に国を追われたルソー、極辺の地へ流されたコロレンコがいた……。」<sup>(22)</sup>と述べている。また「中国とロシアの文字の交りを祝す」という文章で「コロレンコからは寛容を学んだ」<sup>(23)</sup>とも述べている。以上の例からみれば、留日期からコロレンコの流刑経験及び作品の中の寛容と反抗が周樹人に深い印象を残した。30年に至るまで、彼は孟十還に宛てた手紙で度々コロレンコを提起していた。また、小説「末光」の最初の中国訳は韋素園（1902-1932）が1931年に訳して出版していた。

管見の限りでは、小山内薫のこの文章は明治期における最も早く、最も全面的にコロレンコを紹介する評論である。この評論は1906年1月に発行する雑誌『テムブル・バア』（Temple Bar）でジー・エッチ・ペリス（G.H.Perris）という作者の論文に基づいてまとめた。雑誌『新小説』第十一年第十二巻7-19頁に発表した。この文章の7-9頁は大体19世紀以来のロシア文学の発展状況を紹介した。「露西亜文学史の暗夜は一百年の永きに続いた」と言い、プーシキン以来、ロシア文学は「始めて国民文学は広い穏やかなものとなるのである。ここに至って露西亜文学は唯に特質ある文学としてのみならず、幽囚時代の露西亜魂の剛胆、柔和、勇氣等の雄弁なる証言として存在するであらう。ウラヂミール・カラレンコは上に述べた二つの時代を連ぐ鎖と見做して可からう。」それから、文章の9-12頁はコロレンコの生涯を紹介した。主に彼の流刑経験を紹介した。1881年新帝アレクサンドル3世への忠誠の誓いを拒んで東シベリアのヤクート地方へ流刑した。流刑時期におけるコロレンコは『マカルの夢』、『サハリエンの一罪囚』、『終りの光』等シベリアの流刑経験をテーマとして描いた。小山内薫はこの時期の創作のため、コロレンコは「忽ち露西亜現代作家の第一流の登った」と評価した。文章の12-18頁で主にコロレンコの代表作品『盲楽人』、『二つの心』、『マカルの夢』、『西伯利亞旅行日記』、『サハリエンの一罪囚』、『終りの光』等を紹介した。その中で、13-17頁でコロレンコの代表作『マカルの夢』を紹介した。小山内薫は「『マカルの夢』が始めて世に出た時は、トルストイが『我が懺悔』や『我が宗教』を以て公衆を悩ましてる時であった、ガルシンの『赤き花』が社会



のヒステリアをして愈々重態に陥らしめた時であった」<sup>(24)</sup>を評価したから、筆者は周氏兄弟がこの文章を通して初めて『マカルの夢』という作品を知ったと推測している。「摩羅詩力説」の材源はこの文章の第17頁で『終りの光』についての紹介部分である。

### 三、雑誌『新小説』と材源の作者小山内薫

この材源を掲載した雑誌『新小説』は明治期における文芸雑誌である。日本近代文学館編『日本近代文学大事典・第五巻』によれば、この雑誌は出版時期から二期に分けられる。第一期は明治二十二年（1889）一月から明治二十三年（1890）六月まで、第二期は明治二十九年（1896）七月から大正十五年（1926）十一月までである。第一期は春陽堂主和田篤太郎の依頼を受けて雑誌刊行の準備を進めていた須藤南翠が、新聞の仕事などに追われているうちに、明治二十一年十月、金港堂から山田美妙主宰の『都の花』が出版されてしまったため、先手を取られた春陽堂は、とりあえずこれに対抗すべく旧作をあつめて『小説萃錦』を刊行し、あらためて、新作をうたい『新小説』を刊行した。第二期は当時出版界の雄であった博文館が、日清戦争たけなわの時運に乗じて『太陽』や『文芸倶楽部』を創刊したのに刺戟されての発刊だが、おおかたの書肆が旧作家の作しか採らなかった情勢の中で、多く新作家を登用することをもって特色とした。編集は幸田露伴、石橋忍月、後藤宙外等が担当する。泉鏡花の『高野聖』や田山花袋の『布団』等名作は『新小説』で発表した<sup>(25)</sup>。『新小説』は数多くの日本文学を発表したばかりでなく、多くの外国文学の紹介や翻訳も刊行していた。その中で、ロシア文学が大きな比重を占める。例えば、尾形国治は不二出版の「『新小説』解説・総目次・索引」で『新小説』に掲載する外国文学の紹介について次のように述べている。「昇曙夢がゴーゴリの小品を紹介し（明治三十六年三月）、アンドレーエフをとり上げ（明治四十三年七月―八月）、小山内薫がコロレンコを論じ（明治三十九年十二月）、上田敏がイブセンを論じ（明治四十年三月）、八杉貞利がツルゲーネフの「ルージン」を紹介、論じているのも、この頃である。（筆者による：この頃は明治三十、四十年代）」<sup>(26)</sup>

『新小説』に掲載するロシア文学の紹介文章を除き、ロシア文学の翻訳も

確実に周樹人が当時に注目した内容の一つである。姚錫佩の実証的研究によって、周樹人は留日期で雑誌『新小説』から二篇のロシア小説を集めた、という事実が明らかにされている。この二篇のロシア小説の書目情報は以下のとおりである。

①プーシキン、『心づくし』、昇曙夢訳（中国語訳：「彼得大帝の黒人教子」）、『新小説』第十二年第二巻、明治40年2月。

②ツルゲーネフ、『くさ場』、昇曙夢訳（中国語訳：「草場」）、『新小説』第九年第十巻、明治37年10月<sup>(27)</sup>。

竹内良雄は魯迅が留日期における日本の雑誌からたくさんの外国小説を集めたという事実に基づき、魯迅が利用した明治期の文芸雑誌に発表した外国小説を統計した<sup>(28)</sup>。とりわけ『新小説』に掲載した外国作品の作者ツルゲーネフ、チェーホフ、トルストイ、ガルシン、プーシキン、アンドレーエフ、シェンキエヴィチ、ゴーリキー、モーパッサン等はいずれも魯迅が留学の時に非常に注目作家である。例えば、『域外小説集』に収録したガルシンの「四日」<sup>(29)</sup>、シェンキエヴィチの「灯台守」<sup>(30)</sup>、チェーホフの「塞外」<sup>(31)</sup>等作品、いずれも『域外小説集』が刊行するまで『新小説』で日本語訳を発表した。このほか、最先端の研究によって、魯迅の「狂人日記」を影響するゴーリキーの「二狂人」（二葉亭四迷訳、中国語訳：「錯誤」）も『新小説』に掲載した<sup>(32)</sup>。

以上の事実が明らかにしたのは、『新小説』に掲載したロシア文学の紹介と翻訳は留日期の周樹人にとって不可欠な文芸資料である。小山内薫のコロレンコ論もその中の一点のものであるということである。

前出の『日本近代文学大事典』に基づき、材源の作者小山内薫を簡単に紹介したい。

小山内薫は日本近代の出演家、詩人、小説家、劇作家、演劇評論家。明治14年（1881）に陸軍軍医正の長男として広島に生まれた。周樹人と同年である。明治35年（1902）東京帝大英文科入学、森鷗外主宰の「万年草」にメーテルランクの『群盲』などの翻訳をよせて認められた、鷗外の観潮楼に出入りするうちに、鷗外の弟の三木竹二や伊原青々園、それに新派の伊井蓉峰らを知るにおよんで、演劇への興味は急速にたかまった。さらに明治37年（1904）『帝国文学』の編集委員となり、「鸚鵡公」の筆名で劇評をは

じめ、「なでしこ」の筆名で処女劇曲『非戦闘員』を発表した。明治 42 年(1909)市川左団次と共に自由劇場を組織、新劇の開拓に努め、大正 13 年(1924)土方与志と共に築地小劇場を創設、表現派やゴロッキー、チャーホフらの劇曲を上演した<sup>(33)</sup>。

筆者は明治 42 年(1909)まで小山内薫が『新小説』に発表した署名文章をまとめて、時間の順に以下に記す<sup>(34)</sup>。

1、 瑞典の劇作者アウグスト・ストリントベルヒ

第十一年第十二巻 明治 39 年 2 月 1 日

2、 エチエガライ研究(上) 第十一年第四巻 明治 39 年 4 月 1 日

3、 エチエガライ研究(下) 第十一年第五巻 明治 39 年 5 月 1 日

4、 露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ

第十一年第十二巻 明治 39 年 12 月 1 日

5、 病友(小説) 第十二年第一巻 明治 40 年 1 月 1 日

6、 飢渴(小説) 第十二年第十巻 明治 40 年 10 月 1 日

7、 騎兵士官(小説) 第十三年第一巻 明治 41 年 1 月 1 日

8、 劇評家アアチャアと劇作家ピネロオの会話

第十三年第二巻 明治 41 年 2 月 1 日

9、 姉妹(小説) 第十三年第五巻 明治 41 年 5 月 1 日

10、 十三年(小説) 第十三年第十巻 明治 41 年 10 月 1 日

11、 エドレン・バアカア合名演劇 第十三年第十一巻 明治 41 年 11 月 1 日

12、 堀田の話(小説) 第十四年第一巻 明治 42 年 1 月 1 日

13、 途中(小説) 第十四年第五巻 明治 42 年 5 月 1 日

14、 アンドレエフの人間論 第十四年第八巻 明治 42 年 8 月 1 日

15、 感謝(小説) 第十四年第十一巻 明治 42 年 11 月 1 日

小山内薫が『新小説』に発表した文章からみれば、彼は作品を創作したばかりでなく、も積極的に当時の日本文壇に外国文芸を紹介していた。コロレンコを論じる文章は後者に属する。翻訳と紹介以外は、彼も外国作品を翻訳していた。明治 38 年から明治 43 年の六年間、彼は 6 部のチャーホフの小説

を訳した<sup>(35)</sup>。周作人の回想によれば、留学期の魯迅がチェーホフの小説「決闘」を好んだ<sup>(36)</sup>。チェーホフの小説「決闘」の日本語訳の訳者が小山内薫なのである<sup>(37)</sup>。さらには、小山内薫は「ラアエウスキイ（筆者による：チェーホフの「決闘」の主人公）はルヂン（筆者による：ツルゲーネフの「ルヂン」の主人公）よりもっと吾人の時代に近い人である」<sup>(38)</sup>と称し、この点から推測できるのは、魯迅が小山内薫の日本語訳を通してチェーホフの長篇小説「決闘」に興味を持っていた。この問題については稿を改めて考えたい。

#### 四、結語

以上、「摩羅詩力説」におけるコロレンコの商品についての材源を確認したが、次に周樹人はなぜ、どのようにこの小山内薫の文章を引用したのかについて自分の考えを以下に述べる。

まず、周樹人のコロレンコの「末光」についての論述と小山内薫の「末光」についての紹介を比較したい。周樹人の引用部分と小山内薫の文章で使ったものが一致しているかどうかを検討したい。小山内薫の「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」によれば、「末光」と『西伯利亜旅行日記』、『サハリエンの一罪囚』等はすべてシベリア生活を描く作品である。小山内は「末光」に対する紹介で主に老人と子供の会話を描いている。周樹人が引用した内容は、本論の第二章で小山内が「末光」を紹介した部分である。小山内は「末光」を紹介した部分が周樹人の心に大きな印象を焼き付けた。これによって、周樹人はコロレンコの商品「末光」に注目し、またこの部分を「摩羅詩力説」の結論部分に反映していた。だが、周樹人はこの部分を小山内薫の文章を単にそのまま訳したのではなく、ここに自分の考えを述べたのである。これは「摩羅詩力説」第九章の後半部分にあらわれている。

周樹人は「摩羅詩力説」第四章から第九章の前半部分までバイロン、シェリー、プーシキン、レールモントフ、ミツキエヴィッチ、スウォヴァツキ、クラシンスキ、ペターフィ等「摩羅詩人」を紹介し、第九章の後半部分で全文をまとめた。まとめの一つの要点として、当時の中国に対する以下の問題を提起した。「いま、中国において、精神界の戦士たるものはいずこにいるであろうか。至誠の声をあげ、われらを、善、美、剛毅に導くものがあるだ

ろうか。あたたかき声をあげて、われらを荒涼たる寒冷より救い出すものがあるだろうか。国はかくも荒廃した。しかも、賦して天下に訴え後世に遺したエレッヤの如き、最後の哀歌すら、いまだ生まれ出ていない。生まれぬのではない。生れで出でても衆人に扼殺されてしまうのだ。そのいずれか一方、あるいは両方を兼ねているならば、中国は遂に蕭条となる。」<sup>(39)</sup> 周樹人はこの段落で、「精神界の戦士」が少ないまたは「精神界の戦士」が「衆人に扼殺された」ので「中国が遂に蕭条」であるという観点を述べている。「蕭条」という言葉は「摩羅詩力説」第一章の始まりのところでも使用されている。周樹人は「古代国家の文化史をひもとく者は、時代を下り巻末に至るや、必ず凄然たる思いに襲われるであろう。あたかも春暖より秋冷に入るが如く、いのち萌え立つ兆しなく万物みな枯れるさまを、何と言うべきか、しばらく蕭条と言っておこう。」<sup>(40)</sup> ここに見えるのは、「蕭条」は清国留学生周樹人が当時の中国に対する印象を表したキーワードの一つである。「摩羅詩力説」最後の段落だけで、「蕭条」という言葉が四回も使われている。また、「蕭条」と似ている言葉「荒寒」、「荒」等もしきりに出現している。これは伊藤虎丸が指摘した内容である。魯迅の初期評論のモチーフは「寂寞と慨嘆を表す」である。「摩羅詩力説」の例以外、伊藤虎丸は「破惡声論」の「心声」の失われた嘆きをあげた<sup>(41)</sup>。

周樹人は当時の中国の蕭条状況に対する寂寞と慨嘆を明らかにした後で、彼が「摩羅詩力説」の結論部分でコロレンコ作品「末光」の老人と子供の会話を引用したことは、彼の意図をより明確にしている。周樹人は文学作品の具体的な例を通して当時の中国の蕭条たる状況を表現したいと考えたのである。作品の場面はシベリアである。厳しく寒い風景は、蕭条の場面と一致している。そして、シベリアで生まれた子供が「桜の木」や「うぐいす」が分からないように、蕭条たる環境における当時の中国人が「摩羅詩人」や「精神界の戦士」の新文化、新思想が聞こえないのである。趙瑞蕪（1915-1999）は「摩羅詩力説」の結論部分を次のように評価した。「この結論部分はよくまとめられていて、絶妙な構想といえよう。深い感情が溢れている。真実に生き生きして二十世紀の初期における一人の中国を愛する若い知識人の深く考え込みの面影を描き出している。また、もっと大事なものは、魯迅が「好音」

と「先覚」の熱烈な憧れを表し、「中国の蕭条」を恨みながら「中国の蕭条」を破る道を探しつづける」ことである<sup>(42)</sup>。筆者はこの指摘が極めて重要であることと考えたが、既にみてきたように、この引用の材源が明らかになった以上、この結論部分について次のように述べている。この結論部分は小山内薫がコロレンコ作品「末光」を紹介した部分を周樹人が巧みに引用した部分である。シベリアで生まれた子供が「桜の木」や「うぐいす」を分らずに、蕭条たる環境における当時の中国人が「摩羅詩人」や「精神界の戦士」の新文化、新思想を聞こえないという例えを使い、自分の論点を強調していた。この引用の次に、周樹人は「摩羅詩力説」の最後で自分の優れた慨嘆を表した。「如何にも、子供は蕭条の中にいて、その本当の美しい声を聞くことはできぬが、先達の解説を聞くことはできたのである。だが、わが中国には、蕭条を破るその先達の声さえない。然れば、われらにあってはじっと考えこむばかりなのか、やはりただじっと考えこむばかりなのか。」<sup>(43)</sup> これこそが周樹人が「摩羅詩力説」で述べたかったことであろう。

## 注記

- (1) 劉銳：「九十年來「摩羅詩力説」研究述評——兼説「摩羅詩力説」及対魯迅早期研究的限度与可能」（上）、『上海魯迅研究・魯迅与出版』（総第77輯）上海社会科学院出版社、2018年4月；劉銳：「九十年來「摩羅詩力説」研究述評——兼説「摩羅詩力説」及対魯迅早期研究的限度与可能」（下）、『上海魯迅研究・魯迅与左翼作家』（総第78輯）、上海社会科学院出版社、2018年7月。ただし、この論文で日本学術界の「摩羅詩力説」の先行研究を論じたときに、北岡正子の研究のみをまとめた。伊藤虎丸、松永正義、中島長文、清水賢一郎等の研究に言及していない。
- (2) 劉銳：「九十年來「摩羅詩力説」研究述評——兼説「摩羅詩力説」及対魯迅早期研究的限度与可能」（下）、『上海魯迅研究・魯迅与左翼作家』（総第78輯）、上海社会科学院出版社、2018年7月。
- (3) 北岡正子：『魯迅文学の淵源を探る——「摩羅詩力説」材源考・序』、汲古書院、2015年6月、序文の第四頁。
- (4) 北岡正子：『魯迅文学の淵源を探る——「摩羅詩力説」材源考・序』、汲古書院、2015年6月、序文の第9、10頁。
- (5) 清水賢一郎：「国家と詩人——魯迅と明治のイプセン」、『東洋文化』74号、1994年4月。
- (6) 伊藤虎丸、松永正義：「明治三〇年代文学と魯迅：ナショナリズムをめぐる」、



『日本文学』29号、1980年。

中島長文：「孤星と独絃」、『颯風』第33号、1997年12月。『ふくろうの声：魯迅の近代』に収録された。平凡社、2001年6月。

指摘したいのは、中島長文の論文「孤星と独絃」で「魔羅詩力説」第三章で文章の特殊な効用を論じた部分の材源は姉崎嘲風の「芸術と活動的生活」（『時代思潮』第六号、明治三十七年七月）を論じられた。

- (7) 藤井省三：「魯迅とアンデルセン」、『伊藤漱平教授退官記念 中国学論集』、汲古書院、1986年3月、857-858頁。
- (8) 李冬木：「從「周樹人」到「魯迅」——以留学時代為中心」、中国社会科学院文学研究所編『多維視野下的中日文学研究』、社会科学文献出版社、2018年11月、239-240頁。
- (9) 李冬木：「留学生周樹人周辺の「尼采」及其周辺」、張釗貽主編『尼采与華文文学論文集』、新加坡八方文化創作室、2013年11月。山東社会科学院『東嶽論叢』2014年第3期を轉載した。
- (10) 周作人：「關於魯迅之二」、收於周作人著、止庵校訂『魯迅的青年時代』、石家莊：河北教育出版社、2001年9月、129頁。原文は「又甚喜柯羅連珂、後來多年後只由我記其『瑪加耳的夢』一篇而已」。
- (11) 戈宝權：「『域外小説集』的歷史價值」を参照、伍国慶編『域外小説集』に収録、嶽麓書社、1986年、第9頁。
- (12) 周新萍：「魯迅与柯羅連科簡論」、『徐州師範大学学报』、2002年6月。
- (13) 周作人：「關於魯迅之二」、周作人著、止庵校訂『魯迅的青年時代』、石家莊：河北教育出版社、2001年9月。
- (14) 大空社が出版した『明治翻訳文学全集』の「明治ロシア文学翻訳年表稿」によれば、筆者は明治期のロシア作品の日本語訳の数を計算した。第一部の日本語訳のロシア作品を出版した明治15年（1882）から明治45年（1912）まで、665部ロシア作品が日本語に訳された。  
明治期におけるコロレンコの作品の日本語訳に関しては、次の二点の資料を参照：  
川戸道昭等編「明治期ロシア文学翻訳年表稿」、『明治翻訳文学全集37・ゴーゴリ集』、大空社、2000年4月、341-370頁。  
国立国会図書館編『明治・大正・昭和翻訳文学目録』、風間書房、1959年9月。
- (15) コロレンコは中国語訳の表現は「凱羅連珂」、「柯羅連珂」である。小山内薫の表現は「カラレンコ」である。本論の表現は「コロレンコ」を使う。
- (16) 小説「末光」の初の中国語訳は韋素園によって訳された。翻訳集『最後の光芒』は1931年に上海商務印書館が出版した。韋素園訳の「末光」の名前は「最後の光芒」である。小山内薫の表現は「終りの光」。三津木春影の名前は「短日」。本論の表現は「末光」を使う。
- (17) 伊藤虎丸：『魯迅と終末論—近代リアリズムの成立—』、龍溪書舎、1975年11月、第152頁。
- (18) 魯迅：「摩羅詩力説」、『魯迅全集・第一卷・墳』、北京：人民文学出版社、2005



年11月、第103頁。

- (19) 魯迅『墳・摩羅詩力説』、『魯迅全集』第一卷、東京：学研出版社、昭和六十年、149頁。
- (20) 小山内薫：「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」、『新小説』第十一年第十二巻17頁、明治37年12月。
- (21) 小島民雄『集英社・世界文学大辞典2』、集英社、1997年1月25日、230-231頁。
- (22) 魯迅『而已集・文芸と革命』、『魯迅全集』第三巻、東京：学研出版社、昭和六十年、172頁。
- (23) 魯迅『南腔北調集・中国とロシアの文字の交りを祝す』、『魯迅全集』第四巻、東京：学研出版社、昭和六十年、292-293頁。
- (24) 小山内薫：「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」、『新小説』第十一年第十二巻17頁、明治37年12月。
- (25) 日本近代文学館編『日本近代文学大事典・第五巻』、講談社、昭和52年（1977）11月、194-196頁。
- (26) 尾形国治編：『『新小説』解説・総目次・索引』、不二出版、1985年1月、「解説」部分第13頁を参照。
- (27) 姚錫佩：「魯迅初読「狂人日記」的信物——介紹魯迅編訂的「小説訳叢」、魯迅研究室編『魯迅藏書研究』、中國文聯出版公司出版、1991年、299-300頁。  
竹内良雄：「魯迅の初期文学観の成立を探る—魯迅自身が編んだ「小説訳叢」をもとに」、慶応義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション (15), p63-84, 1995。
- (28) 竹内良雄：「魯迅の初期文学観の成立を探る—魯迅自身が編んだ「小説訳叢」をもとに」、慶応義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション (15), p63-84, 1995。
- (29) 苅心訳「四日間」、『新小説』第九年第七巻、1904年（明治37）7月。
- (30) 馬場孤蝶訳「灯台守」、『新小説』第九年第九巻、1904年（明治37）9月。
- (31) 浩浩歌客訳「流入」、『新小説』第九年第六巻、1904年（明治37）6月。
- (32) 李冬木：「狂人之誕生—明治時代的「狂人」言説与魯迅的「狂人日記」』、『文学評論』、2018年第5期。  
汪衛東：「「狂人日記」影響材源新考』、『文学評論』、2018年第5期。
- (33) 日本近代文学館編『日本近代文学大事典・第一巻』、講談社、昭和52年（1977）11月、332-334頁。
- (34) 昭和女子大学近代文学研究室著『近代文学研究叢書第三十巻』、1971年7月、第194-203頁。
- (35) 「居眠り」、雑誌『七人』、明治38年1月、「猫児」、雑誌『新古文林』、明治39年3月、「決闘」、雑誌『新思潮』、明治40年10月、「悪行」、雑誌『明星』、明治41年1月、「熊」、雑誌『新思潮』、明治43年5月、「犬」、雑誌『新小説』、明治43年7月。  
川戸道昭等編「明治期ロシア文学翻訳年表稿」を参照、『明治翻訳文学全集37・ゴブリ集』、大空社、2000年4月、341-370頁。

- (36) 周作人：「關於魯迅之二」、周作人著、止庵校訂『魯迅的青年時代』、石家莊：河北教育出版社、2001年9月、129頁。
- (37) 明治40年(1907)10月から明治41年(1908)1月に小川内薫訳のチェーホフの「決闘」を雑誌『新思潮』に発表した。  
川戸道昭等編『明治期ロシア文学翻訳年表稿』を参照、『明治翻訳文学全集37・ゴロリ集』、大空社、2000年4月、341-370頁。
- (38) 小山内薫：「チェーホフの診察」、『文章世界』4巻6号、明治42年(1909)5月1日。
- (39) 魯迅『墳・摩羅詩力説』、『魯迅全集』第一巻、東京：学研出版社、昭和六十年、148頁。
- (40) 魯迅『墳・摩羅詩力説』、『魯迅全集』第一巻、東京：学研出版社、昭和六十年、94頁。
- (41) 伊藤虎丸：『魯迅と終末論—近代リアリズムの成立—』、龍溪書舎、1975年11月、第152頁。
- (42) 趙瑞蕪：「中外詩歌多彩光輝の旅—讀魯迅「摩羅詩力説」隨想」、『魯迅「摩羅詩力説」注釈・今訳・解説』、天津人民出版社、1982年4月、252頁。
- (43) 魯迅『墳・摩羅詩力説』、『魯迅全集』第一巻、東京：学研出版社、昭和六十年、149頁。